

最近発行の「余市教育福祉村・のぼり通信」は、6月1日の総会特集号のため、毎回の「ビバハウス便り」が載りませんでした。前号No.89でお伝えしたように、この間新しい重要な動きがいくつもありましたので、独自にこの号を発行することにしました。

この間の自然界の変化も目覚しく、はじめに目を引いたのが、かつて俊子が上湧別町での講演を依頼された折、お礼にと送って頂いた赤、黄色のチューリップが、そこそこに咲き始めたことだった。急激に緑が濃くなったもとの、ビバを取り囲むすべての真黄色なレンギョウがいつせいに咲き乱れた。ここ数日で、さらに、淀川つつじをはじめいろいろな色のつつじが咲き始め、これも色違いのもみじなどとも入り乱れ、まさに北海道ならではの初夏の彩となっている。

前回書いたように、3月から6名の若者たちと登町での生活を、久方ぶりに再開したが、今はすでに10名になり、さらに2名の女性入所希望者（東京、神奈川）の申し込みを受けている。最近の相談の特徴は、これまで数年にわたりいろいろな相談機関を訪問してきたが、いずれも具体的なきっかけにはならず、偶然母親などがインターネットでビバを「発見した」ことで急展開でビバへの入所が決まっていることである。

多くの母親、父親たちの長い長い苦渋と忍耐の日々を、身につまされながら受け止めること以上につらく、苦しいことはない。なぜもっと早く彼らの想像を絶するような苦しみを全面的に受け止められるような国としての条件をつくらないのか！？せつかく厚労省の今後の超高齢化・小子化社会への対策として官民の協力で「ニート、ひきこもり」問題の解決を目指した「若者自立塾」を、税金の無駄遣いの一言でわずか5年で打ち切ってしまった為政者たちに対する怒りが収まらない。「事業見直し」として、当時の執行者がまともな検証もせず、全国100箇所以上に「若者サポートステーション」があるので、これらの若者たちの問題解決の入り口から出口までが備わっているというならば、なぜ全国の数知れない多くの父母たちがこれほど日々苦しまなければならないのか？合宿型自立支援施設の絶対的存在価値を今改めて見直すべき時だと実感する。

この間、札幌学院大学の富田充保先生から、教育科学研究会創設60周年記念出版の「教育実践と教育学」第1巻「子供の生活世界と子供理解」（かもがわ出版）を送っていただいた。この中で、先生は「ひきこもり経験と若者理解」～ある青少年自立支援センターにおける若者の声と共同生活の意味を探る～と題してビバハウスの実践を分析して下さった。ただ感謝の一言に尽きる。

+